然らばザーニストとは如何なるものかといふに、他人の幸福とか、社會の福祉とか云ふものは何うても善い、又共和政治であらうと、君主專制であらうと、そんな事は無頓着だ、人間は唯、自由戀愛に活き、生理的の情慾を飽滿せしめて、其中に生活の全意義を發見すべきものである、此れ等の愛の結果が、萠芽の中に枯死して了つても道德上の批難を受ける謂はない、即ち墮胎も罪惡では無いといふのである。

「ザーニン」の思想は、常識道德や、在來の宗教的見地から論難すべきものではない、寧ろ一箇の新宗教で、極端の自由戀愛と、個人主義と、婦女子を奴隷的の地位に引下ろし去る事を、ドクマとして唱導するものに外ならぬのである。

トルストイの「クレーツロー、ソナタ」以來、これ程露國々民を動かした小說は無いといふ事である、この小說の傳播したる思想の爲めに、國民は一時、政治問題を閑却し去り、生慾問題に向つて、注意と興味とを傾注するに至つた

ので、露國政府は國民の政治熱に對して、一時換氣法を行ひ得た譯だが、而も遂に右の小說の發賣を禁止したのを見ても、如何にその感化力の猛烈であつたかと察せられる。

斯くの如く、「ザーニン」は肉感的、生慾的の作物であるが、而も作者は最も眞摯嚴肅の地位に立つて筆を遣つてゐるので、讀者をして肉感の臭ひに咽ばしむる事はあつても、毫も肉情を挑發せんとする目的で書かれてはゐない、「ザーニン」は肉慾の滿足を求むるに極めて放縱で、自己に接近し來る女性を悉く奴隸にし去つてはゐるが、その瞬間の戀愛は麗明、澄徹のものである、赤黑い血肉の闇黑の底に、常に一閃の靈の光が透つてゐる、而してこの自由戀愛と、肉慾の飽滿といふ樂しい方面が人生に存在してゐるのに、唯、重苦しい、味の無い、趣きの欠けた、他の一方面をのみ見て呻吟してゐる者は、畢竟生活の弱者である、取り得べき快樂を取り盡して、意慾を恣まに滿足せしむるのが、眞

の强者であるといふのである、露國青年は天來の福音の如く、此のザーニズムを歡迎し、熱狂し、自己の內心の口片を得たやうに思つた。

アリツイバセフは、下級の農民などに同情を有してゐない、彼等は要するに愚鈍の、意久地無して、祖先以來傳來の固有財產を振り捨てる丈けの力も無く智識も無い、到底浮ばれぬ人種だと見切を附けてゐる、從つて彼は濕つた、低い、暗い、農民生活などの境界に筆をつけないで、花やかな、生々した、朝日の上るやうな人生の自由戀愛の生活に多大の興趣を發見してゐるのである、「ザーニン」は當代の露國文明が產出したる一面絕望的で、他面暗示的の作品とも云へやう、乃至、廿世紀の初頭に於ける、無權威、無理想の過渡時代を反映したる思想の產物とも云ひ得るであらう。

獨逸の一記者は曰く、獨逸の作家には兎角「講釋師」が多い、旨く巧みに物語つてはゐるが、自己の內心に切實にしかく感じて書いてゐる人が先づ少い、

露國の作家は然うで無い、作者自ら先づ眞摯に信じ、痛切に動かされて、始めて筆を執つてゐる、露國の讀者は、又斯の如き種類の小說で無くては讀まない、アリツイバセフ其人も亦かゝる作者の一人であると。

（四十一年十一月）

最近の希臘劇壇

嘗てはエスキユラス、ソホークルス、ユーリピーデス等の大戯曲家蹤出して全盛を極め、流風長く歐洲の劇壇に傳承され、遂に今日の一大發展を遂ぐるに至らしめたる其クラシック劇の泉源地、雅典劇壇の最近の狀況を一報する。

雅典の公衆は、冬期の間は劇場的享樂を求むるものが至つて少ない。國王が建設して保護して行く市立劇場は、何時も五十萬ドラフメンの缺損の決算をして閉場してゐるやうな有樣である。之に反して夏季の間は、ソホークルス子孫の劇場訪問熱は俄に昂騰して、市中の十個の夏季劇場は十日目の夜までも朝早くから賣切れとなる。これは畢竟。暑い夜を何時も海岸で納涼するといふ事も出來ず、さればといつて蒸し返る家の中では猶更堪へ難い。幸ひ夏季劇場は星のきらめくアゼンの空が上に蔽ひかゝり、氣持よく涼しくて、壓迫を感じない

ので、神殿を巡拜する傍ら、市民は妻子を連れて出掛けて來るのてある。男優、女優等はアゼンの空が灰色の十一月頃になると、早速行李を詰め、身支度をして、コンスタンチノープルや、棕梠の花咲く埃及地方へ逃げ出して行く。

神殿の祭事は此地の如く古典式なのは他に見ざる處である、小官吏は洋劍を捨てゝ俳優に早換りする、點火夫は忽ちミューズの祭壇に火を捧げる役となる。門番や車のペンキ塗師、醫師など爭つて假鬚を附け、髯を附け、舞臺上の月桂冠を獲んとする。美しい女性迄も、此晴れの競爭には敢て一歩も人後に立つ事をしないのてある。

希臘の俳優は最高位になると總理大臣以上俸給を獲る事になる、即ち一ヶ月七百ドラフメンの報酬額てある、併し希臘てかかる地位の名優となるには非凡の才能と鐵の如き精力とが無てはならぬ、希臘には俳優學校といふものがなく又特別の訓練を與へてくれるものがない。て彼等は若い未熟時代から彼の扮す

る役をよく了解してゐなくてはならぬ。あらゆる關係上、彼は常に彼自身の教師でなくてはならぬ、外國の客俳優の技術を見るといふ機會さへ殆ど與へられぬと云てよいのである。

それにも拘らず希臘劇壇の天には立派な幾多の明星が輝いてゐる。才能に富み、指揮者としての技倆をも有し、正に第一流の地位にあるものは女優マリカ、コトプリである、俳優の家に生れて藝術に對する感應力を遺傳して居り、豐熟な聲と複雜なチャームとが、偉大な摸擬的天才を相結合して、雅典劇壇の一部では女神として崇拜されてゐる。又一方では優雅で愛嬌に富んだシベル、アドリアン夫人を頻りに稱贊して聲を絶たない者もある。

フェルスド夫人は不斷の精力家で、今王立劇場の第一流の地位を得てゐる。又稀有の美人ロランドー夫人は、スラリとした姿で觀客をチャームし了してゐる。彼女の夫のフェルストの兩親は獨逸人である、此處に一座してゐるのは滑

稽俳優のサギオル、及び、今一人の青年俳優のヤコビデキは多年ミユンヘンに畫家として盛名を博し、現時は雅典の高等工業學校の教授をしてゐる人の一人息子である。

以前には大學が懸賞して戯曲の競爭の審判者となり、藝術の趣味の最高の顧問府となつてゐたが、其結果の當選の作を見て公衆は滿足する事が出來ない、それて遂に彼等自身の判斷が、唯一の標準となる事となつた。

アリストファーネス以來、人生の諷刺を喜んでゐた此國では、諷刺的の作は直に歡迎されて大流行となる、愛蘭物の最初の希臘王オトーの殺戮せらるゝ運命を描いた『牧羊の娘』や、美人中の美人の勝の上てパリカーが自殺するのや、群島の盜賊中間に入つて漂泊し、光明を忌避する分子の强く描かれてゐる『デキー、コンバウアキキ』などは重なる呼物となつてゐる。

戯曲家は勿論公衆の趣味に適するものを出さむと心掛ける。彼は收入の十分

の一を收得する事となつてゐる。目下有名な新進の希臘戯曲家の雄はグレゴリス、クセエノポーロスてある。彼は故郷のツアンテ島の逸話に、好んて其材料を取つてゐる。新劇上場の際には、作者は街道に廣告して、『尊敬する友人よ！余の新作の上場に際し、一は藝術と文學との名譽ある審判を得んが爲めに、又、精靈的の勞作者に對する諸君の愛情を示さんが爲めに、切に來場あらんことを乞ふ』といふ一種特別の招待狀を公にする。

かゝる招集は反響なくしては止まぬ、鑑賞力に富んだ溫雅な公衆は、新作に對して正當な審判を下し得るのてある。（四十二年九月九日）

瑞西より

十月二十七日、伯林を出發してライプチヒに着、大學の講堂に史學の泰斗ランプレヒト教授の教育史序說の講義を聞く、同教授、自然主義に說到りて、ハウプトマンの作などを引例し、批評縱橫、遂に自然科學に對し、精靈科學の發達し來らざる可らざる所以を論明す、同教授の態度風采、學究先生にあらず、一種の文明批評家的てある、說の正否は兎に角、近頃、佛國や、獨逸邊りて、大分聲の喧ましくなつて來てゐる例の、新ロマンチシズムの潮流の矢先などを考へ合せて、一種の默會を得たやうに思つた、

有名なるヴント教授の哲學史講義も聽いた、髮はもう赤白く、少し鼻柱が崖んてゐる處に特徵がある、七十以上の老人て、大分衰弱の模樣てあるが、併し講義の進むに從ひ、聲に力が罩り、顏に熱が出て、學者的の威嚴か加はつて來

たのには、竊に敬意を表せざるを得なかつた、

この二名物を見たので、ライプチヒ訪問の感興は足りたが、尙、シラーが一夏、過したといふシラー、ハウスをも見物し、歐洲人の天才崇拜の情に篤きに感じた、或は、唯、好奇心なら、こんな事をして喜んでゐるのだと云へん事もなからうが、こんな好奇心なら結構である、ライプチヒを發して、ドレスデン着、ツウイングリーの畫堂に、例のラファエルのマドンナを見る、何うも此の畫には一種の生命が通つてゐるやうである、聖母マドンナの顏には處女の美がある、赤子キリストの眼には哲學的の沈鬱と、宗教的の威嚴とが光つてゐる、二人の天使の顏の、無邪氣で、しかも何處か、非地上的の印象を與へる處、見てゐる中に、動かれなくなる樣だ、コンヴエンショナルの惡戯は、鰯の頭からでも五光を發せしむるが、このマドンナの畫許は、正眞正銘、世界畫壇の傑作として永久に殘るべきものであろうと思つて、その前を去るのが惜しかつた、

それから、附近の、ザクセン瑞西に遊んだ、岩の色が少し白過ぎて、硬味を欠いてるやうに思つたが、バスタイ山頂の岩石の自然塔高く聳えて、深く溪谷を凹ませてゐる周圍に、鳶色、黃色、褐色の秋の樹木が、深綠の落葉松と綴り合つて、さま〳〵な色取を見せてゐる景色は、今迄平凡な野と林とに慣れてゐた眼に、强い刺戟を與へた、その中、日が暮れて了つたので、山頂の茶亭より、提灯を購ひ、岩石道を照らしつゝ、漸く山麓に降りた、

ドレスデンより、南獨逸、ミユンヘン市着、この地は、イブセンが多年、住居せし彼の第二の故郷である、マキシミリアン、カフエは、彼が常に出入して、市民の生活を研究してゐた處と聞いてゐるので、第一に、そのカフエを訪はんと、訊ねて見ると、一年前已に閉店したとの事、聊か失望したが、その夜、『ヘツダ、カブラー』の始めて登場せられたるレチデンス座に觀劇し、多少の感興を得た、當夜の劇は、佛國物の、センセーショナルな、つまらぬ芝居であつた

が、兎に角、この建築物と、イブセンの一生とを思ひ合はすの機會を得たのを喜んだ、

ミユンヘン市は全市を擧げて、美術の市、藝術の市である、南獨逸のアデンである、建築に、繪畫に、彫刻に、皆希臘、羅馬の匂ひと色と風韻とを滯びてゐる、バイエルン王國は亡ぶとも、藝術亡びずば可也とは、ミユンヘン藝術家の抱負であると聞く、

十一月一日、ミユンヘン市出發、今已に瑞西に入り、アルペン山下、インターラーケンのホテルに一泊す、餘は後便に讓る。（四十二年十一月）

巴里より

瑞西の山と水とには一種の瑞西色がある、山は皆稜角の多い岩石山で、黑味の中に灰色が稍々勝過ぎてゐるので、岩の膚が柔かさうに見る。恐ろしいやうに嶮しく聳えてはゐるが、何となくかぢり附いてゞも攀ぢ上れさうな氣がする。

湖水の色は青明礬を濃く溶かしたやうに見えて、靜で、落着いて居る。岸から覗くと底がハツキリ透き通り、水中の石も水藻も鮮かに數へられる樣で、水族館の玻璃水槽よりも澄み切つてゐる、このまゝ流すのは勿體ないやうに思はれる。柔味と、沈着と、清冷と、これが相錯雜して、此の地の山水に一種の瑞西色を與へてゐるやうな印象を得た。

瑞西の自然の氣の高いのは自分にも喜ばしかつたが、巴里の都の人間臭の濃いのも更に愉快である。

紐育の雜閙にも慣れ、倫敦の繁華にも熟してゐた自分は、巴里に來て其の人馬車轢い殷んなのに驚かされた。滿都至る處、自働車と馬車と行人とで充ちてゐるの觀がある。居慣れて見たら然うでもあるまいが、誰でも當分はマゴツキさうだ。

ボア、ド、ブロージュの公園の規模も設備も、紐育のセントラル、パークや、ロンドンのハイド、パーク邊りよりは慥かに一等或は數等の上にある。ベルリンのウンテル、デン、リンデン街は、此地のシャン、ゼ、リゼー街の半分にも足らぬものである事を初めて知つた。

巴里美人は化粧術に長けてゐるのは事實であるが、姿、形、皮膚の色、矢張何國の婦人よりも一番垢ぬけがしてゐるやうに見える。

巴里は何れの點から見ても世界の都である、世界市である、一寸と飽かれない處だ。尤も演劇方面に於ては左程に感心が出來ぬ、第一劇場の内部が宮廷式

で、何處までもアーテキフキシャルなのは、伯林邊りのヌーボー式の劇場に比較すると一世紀位の間隔がありそうに思はれる。それに演ずる物も、思想的なのは少くて、多くは唯、藝を見せるといふ方に傾いてゐるやうである。巴里の劇壇は衰頽期らしい。併し是れは他日を期して論ずる事にする。（四十二年十一月十二日）

（以上歐米發信）

ショウ劇『新聞切拔』

四十二年の七月、倫敦のコート劇場に於て上演せられたるショウ氏新作の一幕物、日刊新聞の論說並に通信欄より、拔萃せる時事問題の劇と銘打ちし『新聞切拔』は、ショウ氏從來の作、例へば『カンデキダ』や、『オーレン夫人の職業』時代とは、第一其題目の選擇に於て風變りて、又其材の取扱ひ方に於ても大に趣を異にしてゐる、最近の作『釣合はぬ緣』なども、書物はまだ手にしないが、矢張この調子の系統を引いてゐるものらしく、此を前にしては對話劇『結婚』邊りから、著者の作風に一轉化が來たやうに思はしめるものがある。『新聞切拔』は作者の說明せる如く英國の時事問題、例の Votes for Women! 婦人選擧權要求運動を主題として、これに例のキッチナー元帥が對獨逸策としての國民兵役義務制の主張からの武斷主義や、英國々民の輿論たるデモクラシ

の運動や、そんなものに對する辛辣な諷刺や、皮肉な反語から成立つてゐる、開幕すると、軍務省の事務卓に將軍ミッチネルが手紙を開いて讀んでゐる――キッチネルをミッチネルと露骨にもじつてあるのも、隨分思切つた皮肉な行き方だ、窓外の市街の方からは例の Votes for Women! の叫び聲が聞えて來る、將軍は痙攣的に突立つて、引出から短銃を取出し、暫く耳を聳てゝゐるが何事もないので、恥かしそうに額の汗を拭いて、再び仕事に取りかゝつてゐると、從卒が入つて來て一婦人が突入し、手紙を持參して將軍に面謁を願つてゐると告げる、

將軍、ブツ〳〵云つて開封して見ると、首相バルスキスからの手紙である、バルスキスは即ちアスキスの變名である、將軍意外の面色で、直に面接するから通せと云ひ、從卒がグヅ〳〵云ふのを叱り附け、軍隊的命令で『頭を右、前へオイー』とやる。

戶外では Votes for Women! の叫び聲が聞える、ミッチネル將軍はその口眞

似をやつて、おまけに『子供にも選擧權！』『赤兒にも選擧權！』『猿にも選擧權！』と獨語してゐる處へ、從卒が選擧權要求派の婦人を案内する、然るに其婦人は室内へ入ると徐々椅子を取り外して、流行のズボンを現して來る、ミッチネル將軍、面喰つて『何をするんです、マ、マ、お待ちなさい！』とマゴ〳〵すると、件の婦人『ミッチネル將軍！私は首相です！』云ひ〳〵、帽子と上衣を取り除けたのを見て、將軍開いた口が塞がらず、漸つと『オヤ〳〵、バルスキス君か』と云ふ、こんなに人を馬鹿にした處から始まつて行く、

バルスキスのアスキス首相は婦人選擧權要求の一大群集がこの邊に充滿してゐるから、一國の首相がこんな假裝をしなゝては此處迄來る事が出來ないといひ、サンドストーンの辭職した事を告げる、このサンドストーンも實在の人物ロバーツ元帥あたり(？)をもじつたのだろう、ミッチネル將軍、驚いて事由を詰ると、首相は元帥の立案は不可行のものである、ウエストミンスターの議事院より

二哩の距離に城砦を廻らして、それ以外に婦人選擧權要求運動者の大群を退去せしむるといふ事は、云ふべくして行はれぬといふ、ミッチネル將軍は、イヤ、之はウエリントン公跳足の名兵法だ、婦人連がその命令に從はぬ場合には『射殺』せばよいと武斷主義を揮り廻はす、バルスキス首相は輿論が之を許さぬといふ、ミッチネル將軍は輿論なんていふ特別のものは無い、ある者は唯或人の或る議論許りだ、政治の秘訣は軍隊的方法を用ひるにある、人民が命令を奉ぜぬ場合には唯射殺すのだと議論愈々亂暴になる、首相はそれに對して、次期の選擧に關する國民の意向や、デモクラシーの運動に對する意見など吐く、一方、將軍も負けず、しきりと極端論を持出す、その時、戸外に發射の音が聞える、

從卒に聞くと、『選擧權運動者だ』といふ、首相は驚いて、『番兵が婦人を射たか？』と問ふと、從卒『イヤ、婦人の方が番兵を射ました』といふので、首相の方で安心すると、今度は將軍の方で怒り出す『苟も陛下の兵士たるものを一

市民が射殺したとあるに、大英國の首相は、然うか、と云つて濟ましてゐられるか？』首相は平氣て『兵士は選擧權を有つてゐませんから』などは隨分皮肉てある

從卒が、將軍の命令を待つてゐると、將軍は例の調子て『頭を右、前へオイ！』と云つて追出す、それから『グード、モーニング！』と云つて首相を追返さうとすると、首相はミッチネル將軍の『兵役强制法』の不評を話し始める、將軍は抗辯する、首相は、將軍の意見に反對せりとて貶斥せる一尉官の爲めに、六箇の園遊會、及び十四の舞踊會が廢止された新聞を告げると、將軍逆上して、短銃で自殺せんとする、首相は周章てゝ止める、Votes for Women! の叫び聲はしきりと街上から聞えて來る。

將軍と首相との、輿論や、デモクラシーに關する議論が再び始まる、將軍が、『我等は歴史よりかゝる事を學んだ……』と云ひかけると、首相は『ヘーゲル

の歴史哲學を引合ひに出す、將軍は『ヘーゲルとは誰てす？』などといふ、首相『獨逸の、死んだ哲學者です』と丁寧に教へる、それから獨逸侵入論が出て、空中飛行器、ッエッペリ伯なとが話頭に上る。

從卒が又入來つて、選擧權運動反對同盟會の首唱婦人が對面に來たといふ、首相はその婦人等の主旨を將軍に紹介し、自分は別室に行き、其一行と會ふ事とし、一行中のファーレル夫人が、將軍の室に會見に來る、將軍が打つて變つてチヤホヤする、夫人は少し弄ひ氣味に出る、それて一方少し勃として『八度、戰場に生命がけの働きをした經驗のある者は、自制の途を心得てゐます』といふと、それに對して夫人は『八度、產褥で生命がけの目に逢つた私は、少し位惡口も利きませうよ』などと酬ゐてゐる、そして男子は戰場で戰死すると大口を利いてゐますが、若し婦人がその代りに皆死んだ日には、貴方は床に行つて、二子を產みますか？などと、際どい事をいふので、將軍は『そんな事は醫師

に聽きなさい、私は赤面します』と苦り切る、處へ從卒が、他の二婦人が面會を求めてゐると告げる、フアーレル夫人は『自分は選擧權の事なんか關係ない』と云つて室を出る、後て、將軍と從卒の間に、兵役論などがあつて、最後、例の『頭を右、前へオイ！』が出るが、今度は從はない、尙、抗辯してる處へ、バンガー夫人と、コリンシアの貴婦人とが入來る。

二夫人は『自分等は起つて、選擧權要求派を二哩以外に放逐する事が出來ねば、自分等が武器を取つて立つ！』といふので、將軍は婦人が武器を運ぶ事は法律が禁じてあるといふ、コリンシアの貴婦人は隱し持つたる短銃を將軍の額に擬し、『貴方は英國の婦人といふものを些とも御存じないやうですね？』と恐嚇する、將軍騷がず『法令の命ずる處に依り、かゝる武器を取揚げるのは私の職務です』といふと、一方のバンガー夫人、十八世紀式のピストルを取出し『これも取り

上げる氣ですか？』と、同じく將軍に擬する、『それは武器ではない、好奇心ですゝ、私の頭に覘ひを付けるより、博物館に持つて行くべきものです』などと奇拔な問答がある、バンガー夫人は、これは自分の祖母が嘗てウオターローの戰場で用ゐたものだといひ、又自分所藏の劍は、自分が嘗て手づからカサシンで埃及人を殺したものだと大に其勇氣を誇り、二婦人、聲を合して『婦人に選擧權は要らぬ、唯、兵役に就くの權利を與へよ』と大に男性的女性の本色を發揮し、男子を奴隸とするには、ビスマークの所謂鐵と血とで解決すべきものだ、ビスマークは、男裝せる婦人に相違ない、歷史上眞の勇者は、男裝せる婦人に限るからなどと、大變な議論になる、さすがの將軍辟易して、遂に從卒を呼び、二婦人を戸外に引き出さしめんとする、二婦人は短銃を將軍に擬する、やがてバンガー夫人は、サンドストーン將軍に面會すると云つて、一人て出て行く。

後に殘つたコリンシアンの貴婦人は態度を改めて、將軍が婦人を玩弄品視し

てる事を責める、將軍は辯解する、貴婦人は遂に將軍を『魚！』と罵り、その冷血を嘲る、將軍は彼女に近づかんとする、『近寄つてはいけません、貴方が私を拜みたければ距れてゐて拜むが善い』といふ、將軍『これはバンガー夫人よりも手厳しい』と呆れる、貴婦人は將軍を翻弄して後『選擧權要求運動は醜婦等のする事です、皆が皆、彼女等が然うであるといふ譯ではないが、主唱者は醜婦許りです、自分は醜婦ではないから彼等に贊成しません、婦人は男子を通して世を支配すべきもので、而してその男子は美と魔力とで支配さるゝものです……』と、作者ショウ氏の意見がこの間にほの見える、將軍は『貴方に謝します、成る程この度の婦人問題は要するに醜婦問題であつた、併し英國婦人の大部分は醜婦である、誰かゞこの醜婦の始末仕事にかゝつてやらなければならぬ』といふ、貴婦人は『將軍はデモクラシーに改宗した』と嘲つて立去る。

處へ首相入來り『國民兵役彈制の實施の不人氣を取返すには、婦人に選擧權を

與へねばなるまい』といふ、將軍は先づ婦人選擧權要求反對派を壓服する必要を說く、議論中ばへ從卒駈入り、バンガー夫人がサンドストーン將軍を室に鎖し、兵役權要求の脅迫を試みてゐると報ずる、ミッチネル將軍は起て救助に赴く、程なく歸來、サンドストーン將軍がバンガー夫人を宥める爲に結婚の申込をしてゐる、自分がそれを辯駁にかゝると、バンガー夫人は『頭を右、前へオイ！』と自分へ號令をかけたといふ、ファーレル夫人入來る。

將軍は從卒を遠さけ『バンガー夫人の夫との競爭に自分を扶け得る能力のある婦人は貴方の外には無いといふ事を氣附きました、握手させて下さい』と結婚を申込む、夫人澁つて電話をかける、將軍周章て、『交番所引渡は御免蒙る、私は眞實に氣が狂つては居ないんですから』などは、隨分思切つた惡謔である、夫人は娘へ相談の電話をかけたのである、將軍の年齡を問うて五十二歳と答へると、娘の方から『併し紳士錄には六十一歳となつてゐます』と云はれ、

將軍顏を顰める滑稽などがある、遂に婚約成立する、處へコリンシアの貴婦人再び入來り、將軍の事を聞いてバルスキス首相に結婚を諷する、首相は獨身說を固守し、ローマンチック幸福を要求する、二人默會、從卒は尉官に昇任する、最後に首相は『此際將軍か小學生徒の如く兵士を取扱ふのを止めたやうだ、此は一の道德だ』といふ、將軍は『首相が天使の如く婦人を取扱ふのを止めたやうだ、此は一の道德だ』と笑ふ、これで全曲了る。

此の劇は當時好評を博したものであるが、無論寫實的ではなく、ポンチ繪式の描寫に成つてゐる、即ち嘲馬のショウと呼ばるゝグスタヴ、キードなどの諷刺劇に似寄て、此の作に於てはショウの方が寧ろ英國的ヴキードになつてゐる傾向がある、時事問題を提へてゐる點は際物的といふ趣きがあるが、併しさすがショウの手に成つてゐる丈け、時代の一角の活きた諷刺になつてゐたのは豪い、隨つて形式的にも、內容的にも、時代とピタリと觸れ合つてゐる點にその

特色を認める事が出來る、日本の劇界にも、かゝる樣式の試みをして見るのも、新機運開展の上には一の有力なる動機を與へるものかも知れぬ、唯注意すべき事は、同じ際物としても、此劇の題材の背景には非際物的の婦人問題といふものがあるといふ事と、出て來る人物が皆英國第一流の人々で、彼の國の歷史上、不滅の印象を殘す價値を有してゐる者である事だ、斯る事は此種の劇の作者の豫め勘算に入れて置かなければならぬ事であらう。

獨逸の劇壇

一體に獨逸の藝術壇は、小說よりも詩よりも乃至一切の他の藝術よりも、寧ろ劇壇が運動の中心となつてゐる傾向があつて、我國現時の文壇で讀まれた物も、多くは脚本であるのは其故に外ならぬ、隨て彼の國で出來た脚本以外に、他の歐米諸國大概な國の目立つた作をも決して漏らさず輸入して演る、此世界的な廣い態度は、私の遊學した何れの國でも見ない處で、恐らく此國だけであるたらう。

既に斯樣な廣い態度で劇壇を潤して行く上に、觀客が又一面道樂を離れ、又所謂芝居氣を離れて劇を見てゐると言ふ事も注意すべき事だ、皆が皆、劇を全く藝術的に觀ると言ふまでに至つてないまでも、高尙な快樂を其に求めてゐる事が窺はれる、其例證としては、佛蘭西では見物席に多少燈火を點れるのに反し

て、獨逸では見物席は、日本で今流行してゐる活動寫眞のやうに眞暗でやつてゐる、即ち客と舞臺との間には何の交渉もないやうにしてある、舞臺で俳優が客の顏色を讀んで、商賣化した擧動を演るやうなことは、仕樣にも出來なくなつて居る。

隨て看客の方でも、突詰めた痛切な臺詞を聞いて、直ぐヤンヤと水を加すやうなことともしなければ、オペラ等でも、歌者が緊張した一節を終ると直ぐ喝采するやうな事は決してない、それが佛蘭西や米國の劇場邊りでは、一切無頓着に、寧ろ其喝采で役者に或る刺擊を與へるやうな積りでやつてゐるらしい、こんな風で獨逸の劇場は徹頭徹尾も、舞臺本位になつてゐる、然し獨逸の劇壇が、上に話す如く外國の作物を輸入する點に於て廣い態度を取つてゐるに拘らず、舞臺での言葉は凡て獨逸語でやつてゐる、其點に於てはニューヨークのオペラ乃至普通劇場などと趣が異つてゐる。

又我國の劇場が藝妓や赤襟連の見物で埋められるやうな現象は、獨逸の劇場では決して見る事が出來ない、然る種類の女の出入するのは宅に場末にある寄席風なもので、其處で演ぜられる物は極めて低趣味な、際物風な場當物を出でない、次で中位の趣味を持つ客は、普通オペレットと謂はれてゐる種類の劇場に向ふ、第三の、劇壇に或意味を附するやうな作を登場する劇場の看客は、文學者は勿論、一般に紳士淑女、學生が其大半を占めると言ふ風で、客種に趣味の程度から見て可笑しい程な懸隔はないやうだ。

で、現時盛に行はれてゐる脚本の種類を上げると、イブセンは勿論で、その中の或物は失氣遲蒔に出掛ると、木戸止の厄に遭ふ事は少くない、私は日本の自由劇場で彼のボルクマンが登場されたと聞いたが、彼の作はどんな風に演じられたか？彼の作の終局の方のボルクマンが山の中に入る處は如何樣體裁にやられたか？、獨逸では舞臺に薄い紗を垂れて一體に霞ませてゐた、尙ほ歸朝の

途次、イブセンの『幽靈』を露西亞のモスコーの國立劇場で觀たが、獨逸よりは背景が簡單で、色彩も地味な、單純な中に暗い影を漂はせて居たやうだつた。

獨逸でイブセンの外に、ハウプトマンの作の盛に演じられるのは言ふ迄もない、次ではバアナード、ショーの物が行はれて、『ウオーレン夫人の職業』『戀をあさる人』などはよく觀た、私は英國で幸に此ショウ氏に刺を通じる事が出來て、受付では五分間と言ふ約束だつたが、會つて話して居るうちに、氏も興が乘つて來たか、小半時以上色々と談話を交した、白髮の、氣持の可い老人であつた、尙伯林の唱歌學校でハウプトマン氏が自作の朗讀をした事があつて、私は其を聞いた序に會見を求めて快諾を得たが、端書の行違ひから、約束だけで會はずに終つた、氏は日本人の好きな人だと聞いてゐた。

話が横途に走つたが、其他彼の新ロマンチシズムの作として見られたるホフマンスタールのものは新らしいものとして注目されてゐて、『エレクトラ』がよ

く演ぜられる、オースカー、ワイルドの作ではオベッリの『ザロメ』が非常に人氣がある。

其外コミック、オペラでは『武器と人』『惡魔の徒弟』などが行はれ、喜劇ではデンマルクのグスタフ、ヴキードと言ふ作者の『2×2＝5』と言ふのが、二年餘も引續いて多くの客を呼んでゐる。ショウよりも一層諷刺的のものだ。

ズーデルマンの新作『ストランド、キンダー』が十二月に入つて登場される筈であつたが、此も見損つた、尙ほ獨逸で新らしい劇作者として近頃知られて來た人に、ルーデヒ、トーマと言のがある、齡は已に五十に近いと聞いた、ウエデキントの作もホフマンスタール等と並んで行はれてゐる、又獨逸で近頃背景の濃艶を避けて簡單を尊ぶと言ふ運動が行はれてゐるのは、注目すべき事だらうと思ふ、尤もマックス、ラインハルトの如きは矢張凝つた背景を用ひてゐる。

日本人で伯林に劇を研究してゐる人と言へば歌川、川村の二氏であるだらう、

然し二氏とも研究と言ふよりも、彼地で日本劇をやつてゐるので、來年の四月はハンブルヒに買はれて行く筈だと話してゐた、無論場末の寄席風なもので演つて居るに過ぎない。

此は劇壇の外に走る問題だが、獨逸の今の文壇は、新ロマンチシズム乃至象徵主義が色々な樣式で評論されてゐる、最初は首唱者等の論評に止つてゐたが、今では大分重きをなす諸大家が、眞面目に頭腦を突込んで思索を發表してゐる、彼のヘッケル博士が、大分聲價を落した傾があるなども、一面物質主義に對する反動として、精神開拓の方面の運動が流れて來た、即ち新ロマンチシズムなどが、或領域を占めた證左とも見れば見られる。

この前、ゼゼッション派の國際的な展覽會がミュンヘンで開かれて、多くの繪畫類が集まつた、彫刻ではロダンの作なども出た筈だ、ゼゼッションは即ち此新ロマンチシズムと一味相通ずる物なので、近時佛國の畫壇の新傾向は皆

此派に屬して居る、要は輪廓を除いて、色彩で行くと言ふ事に歸するので、作者の感覺氣持が本位になつて動く譯になる。

獨逸では劇以外の物では、ショウの評論物、ホイットマン、エマアソンなどは依然讀まれてゐる、オスカア、ワイルドの『ドーリアン、グレー』は非常な賣行で、其以上なのは、露西亞のアルツイバアセフの近作『ザニン』であらう、三四度當局から發賣を禁止されたが、今は其の禁止は解かれて、最初は五マーク本だけしかなかつたのが、今は一マーク本まで出來て、恐しい賣行である、其他アンドレエフも盛に讀まれてゐる。コンナンドヰルの小說は俗受ではあるが、尙盛に讀まれてゐる樣だ。

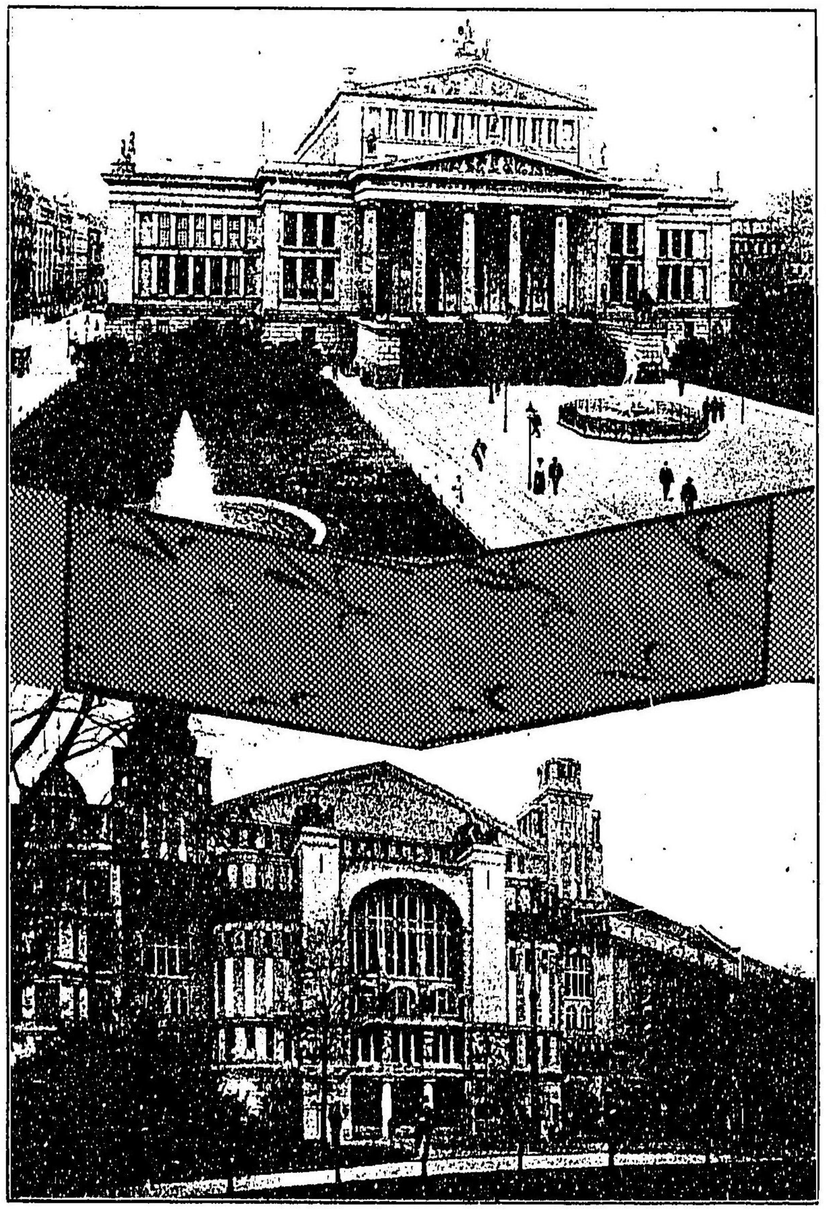
獨逸劇場雜談

少し前後重復する點もあるが、何かの參考にもなる事だから調べて來た獨逸——と云つても、伯林の劇場の事について今一通り話して見やう。

伯林で一番新らしく出來た劇場は、ヘッベル座(改稱モデルネ座)である、建築はユーゲンド式とバロック式を折衷した者で、オスカー、コーフマンの設計、建築に成り、工費が百二十五萬マルク、無論會社組織になつて居る、一ヶ月の收入が三万五千マルク(?)宛て、俳優は男十五人、女十一人、デイレクターは何とか云つたドクトルである、觀客は主として上流か中流で、座席は八百人を容れるのだから、先づ中位な劇場である、建て方は最も新式で金びかなどは少しも用ひず、壁は板張りの寄木細工、見物席の區劃は絹張で出來て居る、凡てが艶消しの至極澁い方で、建築方面では世界中で最新式と云づて好い、此の座で

演ぜられる近代劇の中では、バアナアド、ショウが一番好く出るし、又一番成功して居る、獨逸の作家の作でも、クラシックスなどは決して出さず、新物にしても、第一回上場の外の者は出さないといふ方針らしい、ショウ以外にはストリンドベルヒ、チエーホフなどの作も上場される、兎に角近代的の劇を上場すると云ふ事が、此の劇場の第一の特色と成つて居る、此の座で第一の俳優の給金は一ケ月三千マルクである、又此の座はステルン、コンサヴエトリーと云ふ學校と連絡がついて居る、ステルン、コンサヴエトリーには重に音樂家、殊にオペラ俳優になる者が多く來て居るのであるが、普通のドラマは毎月曜と火曜に一回位稽古をやつて居る、そして其處で稽古したものをヘッベル座で試演するやうになつて居る、兎に角そんな風で、此のヘッベル座は獨逸の演劇の新運動を起すものゝ一つとなつて居るのである。

ヘッベル座よりも更に小さい劇場であるクライネス、テアター、(小劇場)と



伯林王立劇場と新演劇場

云ふのがウンテル、デン、リンデンにある、此の劇場の舞臺は長さ八メートル、高さ九メートル、深さ三メートル半、觀客は三百五六十人が定員になつて居る、此の座は矢張り近代物を演ずるのが特色で、客種は文學者とか、ベルリン大學の學生とか、凡そ文學美術の方面の趣味の高い人が多く、入場料は隨て外よりは三四割方高い、最近此の座で演ぜられたものはルーディヒ・トーマの『モラール』と云ふ劇で、これは昨年の十二月頃までに三百十七回も演じ續けられた、今一つの當り狂言は、グスタヴ、キードの『2×2=5』て、これは前者よりも回數が長かつた、一體このやうに同じ物を永く演ずる、即ちロング、ランの興行の方法を取るのは、一つは舞臺のシーンを變へずに費用を少なくすると云ふ方面からてある、俳優は二十五人居る、創立は八年前で、初めは有名なマックス、ラインハルトがデイレクターをやつて居たが、今では他の人がやつて居る、若し日本の近代劇をやる劇場を起すなら、かう云ふ小劇場を模範とすべきてあら

う。

此のクライネス、テアターと同じ型の劇場はドイツ座にもある、ドイツ座のディレクターは前にも述べたマックス、ラインハルトであるが、此の座は普通のドイツ座とカンマー、スピール（特別劇場）との二つに別れて居て、その特別劇場が即ちクライネス、テアターと同じ小さい式に出來て居るのである、凡て四方板張りて、日本で云ふ棧敷などは別になく、只バーケット（平土間）だけて、その平土間の椅子は絨氈張の肱掛椅子と云ふ體裁に出來て居る、舞臺はクライネス、テアター位で、興行方法は、クライネス、テアターの如くロング、ランではなく、レパートリー、システム、つまり毎日、題を變へると云ふ方法を採つて居て、最近ではウエデキンドの『春期發動』とか、バアナード・シヨウの『メジョア、バアバル』とか、イプセン物としては『幽靈』とか『ジョン、ガブリエル、ボルクマン』とか、ヘッベルの物としては『ギイゲス、ウンド、

ザイン、リング』とか、時としてはクラシックス、のアリストファネスの『フロッグス』とか、又變つた物としては日本の『寺子屋』などが上場された、それ等は多く研究的態度と云ふやうな名の下に演ぜられるのである、特別劇場の方は前述の如くであるが、一方のドイツ座の方では重にクラシックものが演ぜられる、最近には沙翁の『ハムレット』『ミッド、サンマー、ナイト、ドリーム』又はゲーテの『ファウスト』などが上場された、このドイツ座には所謂モデルネ、ビユーネ（廻り舞臺）がある、無論日本のやうに幕の開いてる間に廻すのではなくて、廻舞臺のシーンを四ッなら四ッに分けて置いて、一つ濟めばカーテンを下して次のを出すと云ふ風にするので、時間を要せず、幕合を要しないと云ふやり方である、此の廻舞臺が最新式の舞臺造りだと云はれて居る、兎に角この劇場がドイツで第一流である。

之れに次いではレッシング座がある、此の座は俳優は男三十人、女二十人、

男では今迄アルバルト、バーサーマン、外にエマニユエル、ライヘルとか、オスカー、ザワーなどが居るし、女ではエルザ、レーマンとかイレーネ、トリーシユとか、イダ、オルローフなどが有名である、それに此の座にはイブセン、チルクスと云ふ事があつた、これはイブセン劇を『青年同盟』に始まつて『死者醒めなば』までを著作の年代順に演ずると云ふ企である、此の企にはアルバルト、バーサーマンが主となつてやつて居た、アルバルト、バーサーマンは『幽靈』ではオスワルド、『建築師』ではゾルヂス、『ノラ』ではヘルマー、『ボルクマン』ではボルクマンをつとめた、エルザ、レーマンは『ボルクマン』のエルラ、又、イレーネ、トリーシユは『ロスメルホルム』のリベッカに扮し、イダ、オルローフは『野鴨』のヘッドウイッグなどを勤めた、こんな風に一時はなか〳〵盛であつたが、アルバルト、バーサーマンがマックス、ラインハルトの爲めに引き拔かれてドイツ座の方へ行つたのが災を成して、イブセン、チルクスも破れてしまひ、

折角の事業を頓挫してしまつた、併し『ノラ』とか『ヘッダ、ガブラー』とか『ロスメルス、ホルム』とかは、矢張ちよい〳〵上場されて居る、イブセン劇の外にハウプトマンや、シユニツレルや、たまにはトルストイの物なども演じられる、其以外に俗受物としてローゼンモンタクなどが、間へ挾めて演ぜられる、これなどは已に九年間も演じられて、今に至つても人氣が落ちない、要するにイブセンや、ハウプトマンの作物は多く場面が簡單で濟むし、飾付なんかも變へなくても好いので、費用があまりかゝらないから好いと云ふディレクターの話であつた、最近にはハウプトマンの『ハンネレ』なんかも演じられた、觀客は千二三百人も入ると云ふから、先づ大劇場である。

最も新らしくて規模も最も大きなのはノイエ、シャウスピールハウス（新演劇場）で、此の座の建て方は矢張りヘッベル座と同じくユーゲンド式、バロック式の折衷で、建築技師長も同一人である、觀客は千四五百人を容れる、舞臺は

巾二十メートル、高さ二十一メートル、深さ二十二メートルで、ドイツ座と同じく廻舞臺があつて、十五馬力の電氣力で廻轉するやうな仕掛になつて居る、此の座で演じられるものは通俗の物が多く、ミュージカル、コメデーなんかも出る、折々自由劇場の催しなどあつて、近頃ではゴーリキーの『ナハトジール』だとか、ヘッベルの『ギイゲス、ウンド、ザイン、リング』などが出された、自由劇場は初めは會員だけ見て、一回それが濟んだ後で、毎日曜日などに同じ物を一般の公衆に開放する、模範的劇場としては一番新らしく一番綺麗である、世界の代表的劇場と云つて好い。

以上の外にシャロッテンブルヒのシラー座と云ふ一風變つた劇場がある、これは一寸まあギリシャ劇場式に、見物席がだん〳〵後の方へ高くなるやうに出來て居て、二階三階などは無い、此の劇場は一般の市民に文藝的教育を與へる趣旨で、入場料も安く、二マルク三十フェニー出せば一等席を得られる、普通のド

イツの劇場では帽子や外套を預けるのに二十五フェニー、番附を買ふのに十フェニーも出さねばならぬ規定だが、此の座ではそんな物は一切取らず、入場料だけで見せる、又プログラムに小冊子を添へて、筋の分り切つたクラシック物まで大體の筋書きを見物に呑み込ませて置くやうな方法を取つて居る、此の座で出す物は多くシラー、ゲーテ及び沙翁物などだが、私の記憶して居る近代物ではイブセンの『幽靈』、トルストイの『闇の力』、ズーダアマンの『スタイン、ウンテル、スタイン』、外にグスタフ、ヴキードの『最初の勝利』なども演ぜられた、觀客は一般に中流以下で、日曜日には兵士、工場の勞働者、工女などもあつて、自然と文藝的なカルチュアを受けるやうになつて居る。この座を經營して居る團體の配下で、アルト、ベルリンの方にもシラー座と云ふのがある、これは古い劇場を買つて興行法だけ新らしくしたのであるから、矢張り前の方のシャロッテンブルヒのが新式である、近頃ミュンヘンでマックス、ラ

インハルトの造つたクンステル座も、見物席はこのシラー座式に出來て居るさうてある。

今一つケーニグリッセ、シャウスピール ハウス、即王立劇場がある、これは規模は大きいが、内部の設備が新らしくない、尤もカイザアの保護の下にあるのだから、俳優も百五六十人もあると云ふ話である、此の座で演ずるのは、主としてクラシック物で、先頃死んだウィルデンブルフの物なんかもよく出る、シラー、ゲーテは無論出る、此の座はカイザーの保護の下にあるだけあつて、一般の近代劇的傾向に對して忠君愛國劇を多く演じて、カイザーに對する崇敬心を皷吹する傾向がある、併し昨年あたりから『ノラ』だとか『沈鐘』だとか云ふものが演じられ出した、これは新らしい現象として獨逸劇壇で注目されて居る、ディレクターは某伯爵で、私が話を聞きに行つた時に、伯は事務所へ出て居ながら、手紙で一應伺つてくれとかいふ取次の者の話であつた、餘程權式振

つて居るらしい。

以上の外に王室附のオペラハウスが二つある、新と古とあつて、無論新の方は内部の設備なんかも新式であるが、古い方はフランスやアメリカなどのオペラハウスに比べると規模が小さい、なほ其の外にベルリン座とか、ウエステンド座とか、コミック、オペラ座とか、オペレッテン座、ノイエス、テアターとか云ふやうなのがあるが、建物としても、演ずる物としても、前に掲げた劇場などに比べれば格が落ちる。

要する所劇場の外部の建築、内部の設備に於いて最新式で、出し物の世界的で近代劇、思想劇、問題劇などを絶たない點、それから今一つ、俳優が藝術家と云ふよりは寧學者肌だと迄云はれる程に頭の進んて居る點では、ドイッの劇壇はたしかに英米又は佛のよりは一歩も二歩も、否數歩も進んて居るやうに思ふ。

獨逸劇壇の變調

今から此を獨逸劇壇の變調と云ふは或は誇張に過ぎてゐるかも知れない、併し確に變化の一兆候として認むるに足る新事實が、近頃獨逸のメトロポールに於て出現した、獨逸の雜誌や及び在留の友人の報道する處によれば、獨逸劇壇の中心人物の一人として、先頃故人となつた名優ヨセフ、カインツなどゝ共に、世界の耳目に熟してゐる獨逸座の監督たる名優マックス、ラインハルトが去年の十一月、奮然立つて伯林のチルクス、シューマン、即ち大規模の見世物興行の常設館――東京で云へば國技館的の大ホールの舞臺を利用し大仕掛に多人數の俳優を使つて、ホフマンスタールがソホークルスの希臘古劇を改作せる『エヂポス王』にその技倆を發揮せしめ、近來の大好評を以て迎へられ、最初は唯の一回試演の筈であつたのが、遂に二十回以上まで打續け、その都度五千人宛

の觀客があつて、近來の大入を取つたといふ出來事である、その大仕掛の著しい一例としては、第一場の、王への哀訴の場には、五百人のテーバン人を舞臺の上に出現せしめ、それが兩手を擧げて悲愁する時には、實に一千の腕が一時に列んで見えるといふ次第で、兎に角、非常に強い印象を與へたらしい。

處が、この大好評は、ラインハルトをして大に感奮せしめ、かねて懷抱せるサーカス的の大劇場建設の素志を實行せんとして『五千人の劇場』と稱し、古の希臘劇場に類似せる大規模の物を創立する希望を以て既に檄文を飛ばし、汎く有志者に訴へてゐるさうである、先にはクライネス座を起し、今は獨逸座にカンマー、スピールを監督し、又南方ミュンヘンにクスンテル、テアターを建て、近代劇にも、クラシック劇にもその妙技を縱にして、其人格が直に獨逸劇壇の進歩發展の活歴史の一面をなしてゐる此無二の有力者の新しい企てある以上、早晩、其が具體的のものとなつて現在する日の到來する事は豫期

される。

何故にこれを以て劇壇の變調、若くはその一兆候と目せんとするかと云ふと、それは前にも一言せる如く、ラインハルトの從前關係した彼のクライネス座の如きは、僅に三百五十人の觀客席しか無い小劇場主義の建築物で、又目下監督せる獨逸座にも、三百人内外しか觀客席の作つてないカンマー、スピールがある、斯かる小劇場、即インチーム、テアターは最近三十年來の新傾向に屬するもので、近代劇の寫實的、解剖的なものを演ずるには、この種の小劇場が舞臺的効果の上から云つても、又劇場經營の方法から云つても最も適當してゐる形式だとせられてゐた、併し希臘古劇の如き、本來、二萬人以上を容るゝに足つたデンスの大規模の劇場で上演せられつゝあつた物は、近世の一體に狹小となつた劇場で演ぜられては何うも印象の輪郭が錯誤を生じて來る、佛國のコメデー、フランセーの如き、比較的大きな舞臺で、上演されたソホークルス劇の印象す

ら、後に、佛南のオランジの五千人を容るべきローマ式劇場で上演された際の有力なる効果に比較され得なかつたといふ實例もある、その他の沙翁劇にしても、シラー劇にしても、大まかな、輪郭的な、形の上から直覺的に訴へて觀客を感動せしむる底の、クラシック物は、インチーム、テアターでは勿論、普通の劇場でも、脚本の眞に要求する所のものを滿足せしむる事は不可能である、マッスの力を利用して、藝術的効果を生ぜしむるものゝやうな事は、甚だ困難で、不可行の場合が多い、これがやがて、小劇場を監督し、經營する方面にも因緣淺からぬラインハルトをして、更に大劇場の要求の新らしい叫びを擧げ、又敢てその實行を企圖するに至らしめた理由の主なる一であらうが、他面には、從來のインチーム、テアター熱に對する反動とも見らるべく、此れやがて近代の寫實的、解剖的演劇に對し、汎い意味で新古典主義（ネオ、クラシシズム）の運命劇、性格劇、ローマンチック劇、若くは形式の莊嚴とか、美麗とか、壯大とか、感覺的に直に人を動

かすやうなものを多數の觀客が要求してゐるといふ、半面の消息を傳へて來たものとも見られる。

又この、ラインハルトの新企圖と同時に、伯林の近郊、湖水の名所たるスバンダウに、ナワア、テアター、即ち船上の劇場が常設さるゝ事に成たといふ報道がある、之は道樂分子が多いものとは思はれるが、又以て變調の一たるには相違ない。

要するに、此の小劇場主義に對する大劇場主義の叫びは、彼の近頃西洋一體に流行する、野外所演とも一面の關係があるらしく思はれる、即ちマーテルリンクがレプラン夫人をして自己の住宅たる古寺院の中に、自作『ペリアとメリサン』を演ぜしめ、觀客一人に四十弗宛の見物料を徵せしといふが如き、又、米國の女優モード、アダムスが、ハーヴアード大學の運動場に於て一萬五千人の觀客の前に千餘人の俳優を使ひ、シラーの『オルレアンの少女』の、

凱旋の場を演じて大喝采を博したといふ如き、この野外を利用する一半の理由たる、大仕掛大規模といふ事を、屋内に取入れんとして、大劇場を建設する新運動を起すに至つたものとも云へるだらう、兎に角、常に活氣と新らしい生命とに充ちてゐる歐米の劇壇は羨望の他はない。(四十四年巻)

(以上追補)

最近
歐米劇壇
完

（近代歐米劇壇）

明治四十四年六月十日印刷
明治四十四年六月十日發行

著者　中村吉藏

東京市日本橋區茅場町三丁目八番地
發行者　大橋新太郎

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷者　飯田三千太郎

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社秀英舍第一工場
印刷所

東京市日本橋區本町三丁目
發行所　博文館
（振替貯金口座東京二四〇番
電話本局二六二〇番）

（定價金壹圓）

著作權所有

演劇新潮

文學士 小山内 薫君著

俳優は讀め！興行主は讀め！好劇家は讀め！

この書は學問の書に非ず、議論の書に非ず、研究の書に非ず。舞臺の組織より、俳優の技藝に及び、俳優の技藝より脚本の解剖に及び**演劇一切の實際的新思潮**を平明なる文章をもて叙せる**趣味の書**なり。年若き著者が啓發たる**演劇革新の心願**は十數葉の美しき挿畫と共に此書の紙間に收めらる

全一冊四六判裝釘瀟洒美本　紙數三百九十頁　正價金五拾五錢　郵稅六錢

肥後武士江戸藝者 **花盛劇楓葉**　櫻癡居士作　正價金廿五錢　郵稅金四錢

博文館發行

史劇十二曲

山崎紫紅君著作

全一冊四六判裝釘瀟洒美本　紙數五百九十頁　正價金九拾五錢　郵稅八錢

最近二年間に於ける著者勞作の結晶物なり。上場せられて都下の劇壇を眼はしたる

歌舞伎物語。その夜の石田。乱れ笹。松一木。

信玄最後。當流鉢木。破戒會我

外に**明智光秀。**戀の洞その他三篇

を收めたり、著者の脚本は所謂机上の空帳にあらず、如かもまた清新の氣ありて媚俗の態なし、劇に志ある諸君一讀を乞ふ

芳哉義士の譽　櫻癡居士作　正價金參拾錢　郵稅金六錢

山中平九郎　櫻癡居士作　正價金參拾錢　郵稅金六錢

博文館發行

新譯 社會劇

土居春曙君新譯

本書は勝利三幕清潮四幕遊廓一幕空想三幕の四篇を收む。

本書は著者が登場の經驗により直ちに實演に適せしむべく少からざる苦心と用意とを以て執筆せるもの本書は新社會劇を研究せんと欲する初學者に取りて唯一の新階梯たるを以て苟も劇に志せる者は本書に依りて私演期續を試み見よ西劇の新味を會得すると同時に我將來の藝壇に資すべき清新の演法は自ら其の間に發明せらるべし

正價 金六拾五錢 小包料金八錢

〔全一冊菊判洋布上製頗美本 紙數三百四十一頁〕

脚本傑作集（下卷）

博文館編輯局編（上卷發賣禁止）

四六判洋布脊皮上製 正價七拾五錢 紙數一千百六十頁 小包料拾貳錢

江戸時代諸名家の脚本中最も巧妙にして最も興味多く古來劇に演じて最も行はれたるものを蒐む我劇詩の妙を味はんと欲するもの此書を措いて他に求むべからず劇を好む人文字を嗜む人共に一書を備へざるべからざる珍書なり

（博文館發行）

校訂 俳優全集

博文館編輯局校訂

（目次）

▽妖仙天狗高 ▽色三味線 ▽枚珊瑚京打幹 ▽流行歌 ▽三日月おせん ▽いろは假名娘席書 ▽明勇八幡祭 ▽向人廓山彦 ▽其儘夕霧譚 ▽蝶雙春花壇 ▽ぬしや誰問白藤 ▽傾城が猿 ▽春の曙 ▽杜若紫再咲 ▽風俗三國志 ▽伊達姿辰巳八景 ▽娘客意氣地 ▽和歌三神由來 ▽尾上松緑 ▽手前味噌 ▽狂言袴

正價 金七拾五錢 小包料金拾貳錢

〔全一冊四六判洋布脊皮上製美本 製本堅牢 紙數九百七十六頁〕

長井金升君校訂

俗曲大全

全一冊四六判洋布脊皮美本 紙數一千八十六頁 正價金七拾五錢 小包拾貳錢

大和田建樹君編

日本歌謠類聚

全二冊四六判洋布脊皮美本 紙數各冊千頁以上 正價金七拾五錢 小包拾貳錢

（博文館發行）

俗曲評釋

文學博士坪内逍遙君
文學博士上田萬年君 序

文學士 佐々醒雪君著

近世三百年の歌謠史は本書に盡きたり、俗曲中の名篇は悉くこゝに網羅せられたり、されば文藝史上風俗史上好個の參考書たるべきは言はずもがなれ、その家庭に、宴席に、芝居に寄席に常に絃歌を聞かしつゝ、その歌曲の名稱をも意味をも知らざるものは本書に依りて初めて、母國の歌曲を玩味することを得んか、著者は現代唯一の俗曲研究家にして且つ頗る近世の文藝に精し、況や各篇近代の風俗に精通せる諸方が、百方考證を重ねたる艷麗なる挿畫あり、乞ふ世間の片々たる評釋書とは同一視せられさらんことを

全六册 洋裝四六判洋布上製各册 正價各册金五拾五錢 郵税各金八錢
木版錦繪及び挿畫數十個入

（書名）
第壹編 江戸長唄
第貳編 箏唄
第參編 河東
第四編 上方唄
第五編 小唄と端唄
第六編 常盤津（近刊）

（博文館發行）

音樂通解

上 眞行君序 東儀鐵笛君著

近時我樂壇の興隆に伴ひ、音樂書の刊行日を逐ふて盛なり然れども其多くは實際演奏用の樂譜の類か若くは單に符號を說明したる普通の樂曲に過ぎず本書の如く音樂全般に關し樂理と實際の兩面に涉りて西歐大家の名說を參酌し以て音樂の要義を解說せるもの未だ他に類例を見ず殊に行文平易何人といへども音樂の趣味と智識とを修養し得べく音樂家音樂教育家は勿論苟くも音樂に趣味を有する人々に對して裨益する所蓋し尠少ならざるべし

正價 金五拾五錢 郵税 金六錢

（全一册洋裝四六判裝釘滿酒英本）

文學士 石倉小三郎君著
西洋音樂史
全一册洋裝菊判三百十七頁
並製金四拾錢 郵税八錢
特製金五拾五錢 小包八錢

東京音樂學校教授 前澤久八君著
洋樂手引
全一册菊判和裝紙數三百頁
正價金四拾五錢 郵税八錢

（博文館發行）

新洋行土産

巖谷小波君著　久保田米僊畫伯裝釘

全二冊新形四六判表裝
金模様入美本（函入）
正價各冊 **金壹圓卅** 小包料各八錢

先に伯林二年の觀察を洋行土産二卷に著はして、爲に洛陽の紙價を貴からしめし著者は此度渡米實業團に加はつて在米三月間の見聞を新洋行土産として發表す著者が鋭利なる眼光と巧妙なる筆致とは世已に定評あり而して彼の實業團の渡米や亦本邦空前の擧なりとす本書他の外遊記に比して其光彩を異にせるもの素より論を俟たざるべし

寫生旅行 **魔宮殿見聞記**　吉田博君著　並畫　正價金九拾錢　小包料金八錢

田中湖人君著
最新 **倫敦繁昌記**
全一冊四六判洋布　正價金壹圓
上製七三二頁　小包金八錢

大阪毎日新聞評　神戸又新の倫敦特派員たる著者が一種奇警の觀察と輕妙洒脫の筆致を揮つて倫敦の表裏兩面を縱横無盡に活寫せる通信を編次して一卷となせるなり本書に於て最も取るべき處は忠實によく倫敦の各種の社會を描寫し恰も一幅のパノラマを眼前に展開せる如き觀あらしめたる處にあり倫敦案内記としては蓋し其優なるもの一ならん

（博文館發行）

北米の花

田村松魚君著　（全一冊彌判表裝普美紙賀精良）

正價 **金壹圓拾錢** 小包料拾貳錢

著者は青年文士中一種の風骨を有す。年少氣鋭、未見の山河と未知の社會を研究し、別に其作風を起さんとするの慨あり。三十六年北米の野に遊び、御來六年間の長星霜具さに米大陸の天地に放浪し、研鑽琢磨功を積んで後歸朝。今春東都の文壇に立つ。此書は即ち著者が新らしき生涯と新らしき趣味とを世に公にせる其第一聲なりとす、卷中收むる所の長短篇小說數種及び隨筆數項は、皆北米の花の美と其艶麗を競ふ。

北米世俗觀　田村松魚君著　正價金參拾五錢　郵稅金四錢

永井荷風君著
あめりか物語
全一冊四六判　正價金六拾五錢
口絵十數葉入　郵稅金六錢

（目次）○船室夜話○野路のかへり○岡の上○酔美人○長髮○春と秋○雪のやどり○林間○悪友○舊友○疲醒め○夜の女○一月一日○曉○市俄古の二日○夏の海○夜半の酒場○落葉○支那街の記○夜あるき○六月の夜の夢●附錄フランスより○船と車○ローン河のほとり○秋の巷

（博文館發行）

花つみ日記

文學博士 姉崎正治君著

全一冊洋裝四六判裝釘清楚コロタイプ及寫眞版三十二枚挿入

正價 金壹圓參拾錢　小包料金八錢

南イタリアの美國、北スコットの山地、野邊には草花を摘み、古寺に美術の花を賞でし日記一篇、そが中には湖畔の佛誕會に異國の友を會して、佛教を語り、ロマの寺院に耶教會の生命活動を視察し、南歐に北歐にあらゆる種類の交友に接したる跡を傳ふ。天然美術の記錄宗教文明の評論として江湖の一讀を求む。

（博文館發行）

歐米漫遊雜記

鎌田榮吉君著　正價金四拾錢　郵稅金六錢

大英國漫遊實記

水田榮雄君著　正價金七拾錢　小包料八錢

（博文館發行）

短篇十種 モウパッサン集

前田晁君譯（最新版）

モウパサンは世界第一古今獨歩の短篇作家として天下に名聲の響いてゐるフランスの小說家である本書は彼が諸々十年の間に絕倫の精力を揮つて世に公にした二百餘の長短篇の中から偉大なる文學者として彼の健全なる各方面を優に代表し得る作品十篇を選んで忠實に飜譯したものである近代文學集の大成者にして兼れて現代日本の新興文學に最も多くの影響を與へた彼の嚴肅なる主觀と精透なる觀察と誠實沒私念の態度と直截にして明快なる文章とは悉く此一卷の中にこれを窺ふことが出來る文豪の面目に親しく接せんと欲する人は希くは本書を熟讀既味せられよ

正價 金四拾五錢　郵稅金六錢　（全一冊四六判裝釘清楚紙數三百頁）

吉江孤雁君譯
三篇三種 **ツルゲーネフ集**
正價金四拾八錢　郵稅六錢

相馬御風君譯
短篇六種 **ゴーリキー集**
正價金四拾五錢　郵稅六錢

文學士　小松月陵君譯
沙翁物語十種
正價金四拾五錢　郵稅六錢

（博文館發行）

エト 3769

兩性觀

男の好く女
女の好く男

水田南陽君譯

（全一冊三六判二百五十九頁）

二

正價 金卅錢 郵稅四錢

○愛の御威光（戀人のイシスヒレーション。獨逸皇帝は如何にして皇后陛下を見染られしか外三項）○利己心なき女（九項）○青春の戀愛（健全なる自然の戀愛は初一見の胸に宿る。戀人はお互に何を話して居る乎外三項）○御亭主の選擇（如何な亭主も無いより優し乎外四項）○男の好く女（男は如何な細君を好く乎（外四項）○戀愛の障害物（五項）○名士の戀と勇者の艷書（五項）○支那の婚禮（初めて女を見た青年の戀物語外四項）○紳士とは如何んな人乎○余に友人あり○行儀の衣裳

婦人國

桐生悠々君譯

正價金四拾五錢
郵稅金六錢

秋吉無碌君譯
醫學上の戀愛觀
正價金參拾錢 郵稅六錢

宮本桂仙君著
西洋男女交際法
正價金廿五錢 郵稅四錢

伊達奥洲君著
女性觀 附通人漫語
正價金貳拾錢 郵稅貳錢

（博文館發行）

332
107

074822-000-1

332-107

最近欧米劇壇

中村　吉蔵／著

M44

CEK-0159